The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	信多純一先生の学徳に感謝
Author(s)	大橋, 正叔
Citation	語文. 2019, 112, p. 1-4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77196
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

信多純一先生の学徳に感謝

大橋正叔

私のよく知る信多純一先生は日本近世文学の真摯な研究者としての姿であり、その学徳を記すのが、何とお叱かりを受けようが、先生を偲ぶにふさわしいと思う。

私が信多先生とお会いしたのは、昭和四十三年十月の大学院後期授業初日で、私は修士一年次生（二四歳）、先生は奈良女子大学から大阪大学へ転出されての赴任（三六歳）であった。当時、信多先生は、『宇治加賀掾年譜』に代表される堅実な調査に基づく実証的な論考を次々と発表され、近松門左衛門や浄瑠璃研究の中堅研究者を代表する存在であった。私は、卒業論文に近松門左衛門を選んだことから、山根賢吉先生の勧めもあり、信多先生が移られるという大阪大学大学院を受験し、幸運にも入学が許可されたのである。依頼、五十年に亘り恩師として多くの導きを、また、いろいろな場で厚誼を頂戴してきた。ありがたいことである。

修士課程に三年間在学したが、二年目は大阪大学も当時の大学紛争の渦中にあり、全共闘による文学部校舎封鎖、文学研究科院生協議会のスト権成立により授業は四月から十二月末にストが解除されるまで全くなく、先生の授業を受講したのは一年半だけであった。修士論文も、信多先生の下で近松ではとても書けないとの思いから、中世と近世との間を探るという態であった。では疎遠かというと、逆に大学紛争が教員と学生との間を却って近くし、話し合う機会は決して少なくはなかった。当時、文学部教官の中で最若手であった信多助教授は脇田修助教授と共に学生との折衝役に当たっておられたし、国文学講座内でも教官と学生・院生との懇談や研究会等もしばしば開かれていた。修士課程修了後、昭和四十六年四月から私は国文学講座の助手に就き、三年間講座の一員として勤め、先生は上司でもあった。信多先生は、池上禎造・田中裕両教授、宮地裕助教授の三方が京都大学の大先輩ということもあり、講座も和気藹々で、落ち着いた研究環境の中におられたと思っている。

信多先生と私との強い繋がりは、近松二百五十年忌を記念する

「近松展」（於　阪急百貨店）の最終日、昭和四十八年十一月二十一日に、展示の片付けを済まし、二人で国鉄大阪駅の阪急百貨店側ガード下にある、背に冷たい風を受ける屋台の酒を飲みながら、演劇研究会を復活する決意を示された先生の熱い思いを共有することによってなったと思っている。

関西の演劇研究会は、昭和三十二年四月より浄瑠璃関係の資料整理や研究会などを行ってきていたが、昭和四十五年七月に年輩の先生方の間に生じた事情のため休会となっていた。その再開には諸先生方との話し合いや了解が必要とされるところであるが、休会の因を蒸し返すことにもなりかねないため、信多先生は全てを引き受ける覚悟で再開の言挙げをされ、同調される先生方に協力を得ようとの決心を固められたのである。その決意を聞き受けたのが私であった。これには契機となったこともあるが、信多先生にとっては、遠慮ある先生方へご自身の独歩を申告する出来事と私には思えた。演劇研究会は、昭和五十年四月から信多研究室を事務局に、大阪大学文学部会議室を研究会会場として再開される。以後今日まで事務局や会場は変遷するが会は維持され、多くの近世演劇研究者の研鑽と育成の場となったことは衆目の認めるところである。その功績の第一は信多先生の再開への決断である。この時を機に、先生の活動、研究領域の幅が一段と広がっていったように私には思える。

信多先生は日本近世演劇研究をライフワークとされていたが、本文に添えられた挿絵から作品の趣意を求める斬新な論考も発表され研究領域を広げられていかれる。このことも、私が最初に受けた演習『好色一代男』の授業の中で、日本近世文学会で「一代男」の挿絵をめぐって『義経記』との関係について発表したが、否定的な反応であったと残念そうに言われ、後に著書『にせ物語絵―絵と文　文と絵』（平成七年五月）「あとがき」に「私が、絵と密接につながりをもった契機は、昭和四十年十一月の日本近世文学会名古屋会場での口頭発表『好色一代男成立の諸問題―新発見の粉本を中心として』に始まるといってよいであろう。」と、自身で述べてられたように早くから持ち続けておられた課題だったのである。平成二十二年九月に『好色一代男の研究』（岩波書店）を上梓されているが、本当に長い間温められておられた課題だったのだと思うと同時に、初志貫徹される先生の研究心の持続力を改めて仰ぎ見ることである。刊行後、お宅に伺うことがあり、同書への感想を聞かれたが、通説となっている「一代男」等の挿絵西鶴自画説に対して西鶴自画にあらずと断定され、西鶴下絵に基づく「一代男」挿絵の判読、加えて『義経記』『曾我物語』を「一代男」の粉本とする信多新説に、何と答えたか、ただ、論証のあり方がこれまでの先生の論文とかなり違和感のあることはだけは伝えた記憶はある。私の感じた差異は先生も十分承知で、挿絵研究については「近松研究等の過程で行なった、年月をかけ彫琢していった論文執筆のあり方とはほど遠いものに私にも思えた。」（『にせ物語絵―絵と文　文と絵』）と自身が言われている。この『好色一代男の研究』の前、平成十六年に『馬琴の大夢　南総八犬伝の世界』（岩波書店）を、

さらに、平成二十年には『浄瑠璃物語の研究』（岩波書店）を刊行されているが、これら三著は信多先生の畢生の大夢の結晶というべき著書と私は思っている。

三著書に共通するのは、通説、または、それまでの諸説に対して信多先生が独自の見解を披露されている点である。三著書それぞれの発表時に、紹介や書評に類する論評がいくつかは出されているが、正面から向き合った形で反論、もしくは、毀誉褒貶を述べた論は管見の範囲では『浄瑠璃物語の研究』を除いてほとんどなかったかと思う。『浄瑠璃物語の研究』は、語り物の特質として、残存諸本に見られる増補・書き継ぎ等の流動的な本文生成を経て、「浄瑠璃物語」が成立したとする従前の見解に対して、「浄瑠璃物語」の本文は首尾整った「原浄瑠璃」が先にあり、残存諸本は「原浄瑠璃」の省略・改編による本文であるとする既発表の自説を、新資料を得て敷衍・補強される、先生の研究への持続力を伝えるものである。

平成三十年十二月二十六日、神戸三宮生田神社会館で「信多純一先生を偲ぶ会」が催されたが、先生のご遺影の前には数々の御著書が並べられており、業績のほどが偲ばれた。それらは私の手元にもあり、その中の多くは先生ご自身から頂戴したものである。この著書を一覧して、通読できず中断した一書があることを思い出した。それは『馬琴の大夢　南総八犬伝の世界』である。先生にとって、『南総里見八犬伝』は、既に『にせ物語絵一絵と文と絵』「あとがき」に「最近惹かれる作品に『南総里見八犬伝』がある。この作などこの（挿絵をヒントとして、その作品の秘められた構想・趣意を探るという、私なりの切口をもってする作品研究に向かう）立場で考察するにもっとも好個のものである。作者馬琴自身挿絵の構図指定を行ない、さらに己が作の深意をその中の一図に籠め、自註して読者に注意喚起をさえ行なっているのであるから」と、予告まで述べておられる意中の作であった。考究の万全をなしての上梓は信多先生の大夢でもあったはずである。しかし、本書の読了には先生と同じような挿絵に対する感性が求められ、正直に言えば、その理解に大きな負担を感じたのである。先生の感性の鋭さは『心中天の網島』の読みに窺うことができる。一見繋がりのない「かみ」という語に連関する意味を捉えて、醸し出す情緒を探り浮かび立たせて、作者の隠れた作意を剔出する。鋭い感性の育成には浮世絵や仏画・仏教版画にも造詣の深い、先生の幅広い見識も関わっていると思う。斬新な読解であり、挿絵の解釈にもこの読解が働いていると私には思えた。『馬琴の大夢　南総八犬伝の世界』では、挿絵の構図を独自の感性によって受け止め、其の意味する内容を順次付け加えて読者を馬琴の意図へと導くが、この連関を繋ぐのは、文字の類似、連想を引き起こす事柄の指摘であるが、論証に惹かれる以上に多大な関連資料を提示する著者の筆勢に押し切られ疲れてしまうのである。「私の『八犬伝』秘鍵研究」と言われるほど、作者馬琴その人に密着した思い入れの深い真摯な研究、これが信多の研究態度である、と明言されているかのような筆運びである。馬琴の強靭な持続力、精神力

を称えられるが、それはそのまま先生自身にも当てはまるものである。この圧力に数歩退くほか術がないのはおそらく私だけではあるまい。改めて、『馬琴の大夢　南総八犬伝の世界』を読み直して気付く先生の偉大さであり、ただただ学徳に感謝するばかりである。

（おおはし・ただよし　天理大学名誉教授）